

はんだまにじんじゃ

食事が終わった三歳の孫が、食卓のベビーチェアに坐って涎掛けをしたまま、「はんにゃはらみた」と言い出しました。茶碗にスプーンを軽く当てて、鐘を鳴らしたつものようです。そして両腕を前に伸ばし、その腕の間に頭を深々と下げて五体頭地の礼拝をします。その仕草を見て、父親は照れ笑い。本堂でお経を唱えている親の後姿を見て真似ているのです。

また別の日に、「はんだまにじんじゃ、そだまじんじゃ…」と、なにやら真言らしい呪文をゴチャゴチャ唱えながら、例の如く頭を深々と下げて、「おとうさんありがとうございます」といってお勤め終了。

そんな孫の動画を嫁が私のケータイへ送ってくれて、高野山で一人笑いをしています。退屈しぬぎにはとっておきの動画。幾度も見ている自分が可笑しくなります。

孫たちは気に入ったユーチューブの動画を繰り返し見て、知識を蓄えていきます。言葉や数字、物語を一つ一つ増やしていく孫の成長は楽しいものです。

作文に興味をもたせるために、文章で七歳の孫と遊んでみました。私の質問に孫が文章で答えるという遊びです。

私「ひこうきにのったことある?」、孫「ある」、私「いつのったの?」、孫「(こ)いがたへいったとき」、私「ひこうきからなにが見えた」、孫「くも」、私「どんな雲?」、孫「これどうよむの?」、私「くも」、孫「くもがしたにみえた」、私「雲のほかになにが見えた?」、孫「うみ」、私「町は?」、

孫「どうよむの?」、私「まち」、孫「ちいさくみえた」、私「(こ)んげんは見えた?」、孫「みえなかった」…。

こんな他愛ない思いつきの作文遊びに、私も夢中になって筋を誘導していきます。十ページを目指してやり取りをすれば童話の完成。

尻取り遊びは通例ですが、同音のことば遊びも楽しいものです。例えば、「う」のつくものを書かせます。五つ六つはわりと早く思い出せますが、十個は難しいようです。そこで私が残りをスラスラと書けば、孫はうなずいて、次を要求します。

孫守りは痴呆防止と思って、コロナ禍に心配しつつも、高野山と名古屋を、二重マスクにして土産も道草もなしに往来しています。